氏名・（本籍）　佐藤　綾佳（三重県）

学 位 の 種 類　博士（文学）

報　告　番　号　甲　第145号

学位授与年月日　2022（令和４）年３月19日

学位授与の要件　学位規則（昭和28年４月１日文部省令第９号）

第４条第１項該当

論　文　題　目　中上健次作品論

―〈秋幸サーガ〉から見る“父殺し”と天皇制批判―

審　査　委　員　（主査）　酒　井　敏

柳　沢　昌　紀

勝　亦　志　織

中　元　崇　智

審査概要および審査結果

Ⅰ　審査概要

2021年５月５日㈬　佐藤氏より教学部大学院事務課に学位授与申請書類ならびに博士学位請求論文が提出された。

2021年５月12日㈬　文学研究科委員会にて学位請求論文審査にかかわる博士後期課程委員会の開催を決定した。

同　日　博士後期課程委員会を開催し、論文受理を決定するとともに、学位審査委員会の設置を決定し、審査委員４名（内、オブザーバー１名）を選出した。

主査：酒井　敏
副査：柳沢昌紀
勝亦志織
オブザーバー：中元崇智

その上で、審査委員は第１回査読会までに提出された学位請求論文を精読しておくことを申し合わせた。

2021年９月16日㈭　第１回査読会開催（研究棟２階日本文学科共同研究室）。審査委員の合議を経て、課程博士学位請求論文として審査を行うのに充分な内容の論文であると認定した上

で、今後の査読会日程と審査方針を確認した。

その際、それぞれの専門分野に鑑み、副査・オブザーバーに以下の分担で詳細な査読と報告を求めることとした。

第一・二章：柳沢教授

第三・四章：勝亦准教授

第五章：中元教授

2021年10月22日㈮　第２回査読会開催（研究棟２階日本文学科共同研究室）。前回決定した分担箇所を中心に各委員から査読結果について報告を受け、報告に基づいて全体で討議し、論文内容について詳細に検討・審査した。討議の結果を踏まえて次回までに再読、審査を重ねることを確認した。

2021年11月26日㈮　第３回査読会開催（研究棟２階日本文学科共同研究室）。前回の検討・審査内容を確認しつつ、前回報告した査読結果の補足や三読して新たに気付いた点などについて話し合い、最終試験に進むことを合意、日程調整を行った。

2021年12月８日㈬　文学研究科委員会において、公開発表会を対面で実施することを審議決定。また、書面を以て審査論文公示期間を告知した。

2021年12月13日㈪　最終試験（口頭試問）実施（42D 教室）。午後４時40分から５時45分まで。申請論文の内容を中心に、関連諸学についての知見から用語の適否まで詳細な質疑応答が行われ、申請者が学位にふさわしい学識と研究能力を有することが確認された。その過程で、文章表現の一部を推敲するよう助言したことを付記しておく。

同　日　第４回査読会を開催（研究棟２階日本文学科共同研究室）。口頭試問結果を受けて各委員の意見を調整した。

2022年１月７～13日　審査論文公示（一週間）。於研究科長室。

2022年１月14日㈮　最終試験（学位請求論文公開発表会）実施（412教室）。午後４時40分から５時30分まで。文学研究科専任教員を中心に非常勤教員や研究科在学生も参加、審査論文の内容を要約した発表がなされた。質疑応答の時間も設けられたが、疑義や問題点は提起されなかった。

同　日　第５回査読会を開催（412教室）。公開発表会を含めた最終試験全体の結果を受けて各委員の意見を調整した。

2022年１月19日㈬　審査結果の概要を記した書面を付して審査結果を文学研究科博士後期課程委員会に報告した。

同　日　博士後期課程委員会において投票により合と判定した。

同　日　上記の結果を文学研究科委員会に報告し、合格を承認した。

Ⅱ　論文内容と審査結果

１．佐藤氏の論文は、従来「秋幸三部作」として読まれてきた『岬』『枯木灘』『地の果て　至上の時』に『鳳仙花』を加え、〈秋幸サーガ〉として読むことによって中上健次作品研究に新たな展望を開く試みである。全編は「序」・第一～五章・「結びと展望」から成り、「既発表論文発表誌一覧」を付す。作品読解の前提となる枠組みを変更し、主人公秋幸の形成から成長過程までを丁寧に追跡して新鮮な解釈を提出する一方で、緻密な文献調査や現地踏査によっても新知見を得ており、読みと実証の両面から先行研究の乗り越えを図った意欲的な論文である。

序

本論文の基礎となる〈秋幸サーガ〉を定義し、従来の「秋幸三部作」という枠組みの問題点を述べた後、全体の構成に従って本論文の意図と目論見を概観している。合わせて以下の各章で論述のテーマとなる問題意識の提示も行なわれており、本論文の導入部として充分な機能を果たしていると評価できよう。

第一章　〈秋幸サーガ〉の生成過程

中上の初期作品、詩や「岬」以前の短篇小説の中に、〈秋幸サーガ〉につながる要素を探り、作者の内部において〈秋幸サーガ〉が生成される過程を跡付けている。先行研究がほとんど俎上に乗せなかったこれらの諸作から、関連する要素を丹念に拾い上げて〈秋幸サーガ〉のモチーフが形成されてゆく過程を明らかにした労作で、研究史において存在意義を主張できる論文であり、以下の各章の説得力を高める上でも高い有効性を持つ。細部に瑕瑾を残してはいるものの、論者の〈秋幸サーガ〉検討の基礎となる、例えば母系集団や実父、養父と主人公秋幸の葛藤の構造、あるいは“父殺し”や天皇制批判というモチーフなどが作者の中で徐々に焦点を結んで来る様子が納得できる好論と言えよう。

第二章　『岬』論―秋幸が自己を確立するまで

母や姉たち母系に連なる人々の呪言によって自己を確立できず、葛藤の渦中にいた秋幸が、異母妹との近親相姦によって禁忌を破り、確固たる自己を確立する一方で、「あの男」＝実父浜村龍造との対決という新たな試練を背負うまでを描いた作品として『岬』を分析した論。潜在的主人公の位置にいる秋幸が、〈秋幸サーガ〉の主人公たるにふさわしい存在へと成長する過程をたどりつつ、先行研究が充分に読み込めていない登場人物の呼称や言動、においなどの細部を丁寧に読み解いて新見を提出、併せて申請論文を支える基本構造と問題意識を提示して、次章以降へ架橋している。申請論文全体のキーであるだけでなく、研究史の上でも価値を持つ論文と評価できよう。

第三章　『枯木灘』論（以下の三節より成る）

一節　秋幸の死と再生

主人公秋幸は、自身を「路地の秋幸」と自覚することで、西村・竹原・浜村という三つの家のどこにも所属できない宙づり状態の不安定さがもたらす存在の不安から脱出、暴力性を開花させて異母弟秀雄を殺害、山中に逃亡することで神話的な死と再生を果たし、実父浜村龍造と対峙し得る存在に成長する。以上の経緯を描いた作品として『枯木灘』を捉え、先行研究が論じてきた〈反復〉や作中のエピソードについて、読み換えや新たな意味付けを試みた新鮮で魅力的な論。特に、秋幸の成長に大きく関わる「紀子」という女性の名前に神話的な意味を読み込み、〈秋幸サーガ〉全体に及ぶ神話構造を見出してゆく叙述は、ダイナミックな解釈枠組みの提示として高く評価できよう。

二節　土方作業から見る秋幸の暴力性の開花

一節でも言及された「土方作業」に焦点を当てて分析し、秋幸が暴力性を開花させるまでの心理の経過を追跡、一節の論旨を補強するとともに〈秋幸サーガ〉全体を貫く“父殺し”というモチーフの内実を確認した論。「土方作業」が持つ秋幸の内面の葛藤を浄化し心の平安をもたらす効果を重視して、柄谷行人の説く資本主義との繋がりを否定するなど、新しい着眼点から先行説を乗り越えようとする意欲的な姿勢は高く評価できる。前節との関連を強調して論理を整理すると、さらに研究上の意義や成果が高まるであろう。

三節　〈秋幸サーガ〉と神話

一節で論じられた「紀子」の名前の由来を詳細に再説・確認した上で、『日本書紀』に示される神話構造が〈秋幸サーガ〉全体を貫く基本構造をなし、物語の動力となっていることを論じる。イザナギ・イザナミとアマテラス・ツクヨミ・スサノオの関係が勝一郎・フサと美恵・郁男・秋幸の関係に重なると指摘

し、秋幸をスサノオさらにオホクニヌシと重ね合わせて彼の行為を読み解き、意味付けてゆく。一節で提出された仮説や二節の柄谷論批判など、本章が提起した新たな論点に真の解答が与えられており、ここまでの論を総括しつつ“父殺し”から〈秋幸サーガ〉全体の結末への見取り図を示して、申請論文全体の結節点をなしてもいる。先行研究の指摘に目配りしつつ、従来なされなかったダイナミックな読解を提出した力の籠った論と評価できよう。本章全体をバランスよくまとめる配慮が充分に尽くされていれば、さらに説得力が高まったと思われる。

第四章　『地の果て　至上の時』論（以下の二節と補説より成る）

一節　“父殺し”に向う秋幸

実父浜村龍造の自殺によって失敗に終わったと先行論が位置付けてきた秋幸の“父殺し”は、龍造の拠り所を順々に奪い、自殺へと追い詰めるという方法によって達成されており、成功であったと捉え直し、そこから〈秋幸サーガ〉における本作の意義を述べている。少々こなれの悪い論述が残っているものの、本文を丁寧に読み込むことで先行論を乗り越え、新たな展望を開こうとする野心的で新鮮な論と評価できよう。

一節補説　「水の信心」が裏付ける“父殺し”の成功

従来、ほとんど顧みられなかったエピソード「水の信心」の分析を通して、前節で論じた秋幸の“父殺し”の成功を裏付けた論。信者の蘇りの失敗から「水の信心」が邪教であることを確認し、同様の工夫（＝蘇りの空間の造立）によって龍造が期待した秀雄の蘇りも失敗に終わると説く。その結果、全てを奪われた龍造は追い詰められて自死を選ぶしかなくなり、秋幸の“父殺し”が成功することとなる。前節でも言及されていた「水の信心」に論点を絞り、側面から秋幸の“父殺し”の成功を説いて、前節の結論を補強した論であり、補説として有効に機能していると言えよう。

二節　「路地」の真の姿と秋幸の業火

秋幸は浜村龍造に接近することで、差別された者たちが寄り添う温もりの空間と思っていた「路地」が、自らの内部に差別し排除する構造を抱え込んでいたという真実を見出す。実は「路地」は邪悪な存在だったのであり、“父殺し”を果して龍造を越える真の「覇王」となった秋幸は、その強大な悪の力に裏付けられた業火によって邪悪な「路地」を焼き尽くして浄化する。そして、数々の試練を乗り越えて使命を果たし終えた神話世界の英雄のように、物語世界から退場したと説く。多くの先行論が見落としていた「路地」の二重性という着眼点から、前章で指摘された神話構造、本章一節で確認した“父殺し”の成功、さらにその補説で論じた「水」のイメージなどを受けて、〈秋幸サーガ〉という枠組みだからこそできる読解を示した斬新で魅力的な論と評価できる。“父殺し”に至る〈秋幸サーガ〉の構造を明確に示し、ここまでの結論としても機能していると言えよう。

第五章　『鳳仙花』論（以下の二節より成る）

一節　父の欠落から見える天皇制批判

一般に秋幸の母フサの半生を描いた作品と捉えられている『鳳仙花』を、父という存在の欠落や歴史的事実との対照などから、フサの半生の物語を隠れ蓑とする天皇制批判の小説として論じる。ここまでに言及されてきた差別と再差別の構造を、文字を持つ／持たないに基づく支配／被支配の構造に重ね、そこに天皇の言葉で小説を書くしかない作者中上の葛藤を読み込んだり、龍造の背景とされる佐倉を〈路地の天皇〉と位置付けたりするなど、本作を〈秋幸サーガ〉に組み込む意義を確認できる指摘も多い。研究史上の新たな視点や問題意識を提示し、実証的で読み易い叙述によって説得力ある論を展開しており、申請論文の一章としてだけでなく、今後の『鳳仙花』研究にも有益な論文と評価できる。

二節　史実の歪みから見える天皇制批判

作中時間と重なる時期の歴史的事実を、中上が作中でどのように扱っているかに注目して『鳳仙花』を論じる。現地踏査に基づく知見や現地でのみ参照できる資料を多く利用した労作で、これほど詳細な分析は従来の研究に見られず、研究史上画期をなす論と言える。史実と比較して、昭和10年、15年、20年の重要な史実が描き込まれていない点に注目、例えば紀元2600年の祝賀行事（15年）や玉音放送（20年）など天皇制にとって重要な節目となる出来事を敢えて無視することによって天皇制を批判しようとする中上のモチーフを読み取る。従来、専ら中上の母をモデルに女の半生を描いた小説とされてきた『鳳仙花』の新しい読み方を示す一方で、黙殺という方法を自殺へと龍造を追い詰める秋幸の“父殺し”の方法に重ね、前章までの論旨を補強するとともに、従来の「秋幸三部作」ではなく『鳳仙花』も含めた〈秋幸サーガ〉として考察する有効性も示した。佐倉の扱いなど、より慎重な叙述が求められる部分はあるが、手堅い実証的な方法を用いて申請者の力量を存分に発揮した好論と評価できる。

結びと展望

〈秋幸サーガ〉を母系一族と実父を描き続けてきた中上の集大成であり、次のステップへのスプリングボードであると位置付けた上で、本論文の論点と成果を整理し、その意義を確認している。申請者が今後どのような研究に取り組んでゆくかも読み取れ、必要にして充分な結語と評価できよう。

２．佐藤氏の論文は、その生成過程を含めた〈秋幸サーガ〉の読解を通して、秋幸の“父殺し”の成功や作品群を貫く神話構造の存在を明らかにし、さらに中上がこだわり続けた天皇制批判のモチーフが読み取れることも示した。これらは、従来の「秋幸三部作」という枠組みでは得られなかった成果であり、本論文は先行研究の乗り越えを目指した意欲的な論文であるとともに、提出された斬新な解釈によって中上健次作品研究に新たな展望を開く論文であると評価できる。

３．以上のように、本審査委員会は、提出された博士学位請求論文が博士（文学）の学位に相当する論文であり、また、論文提出者が専門領域に関する充分な学識と研究能力、資質を有していると判定した。